

2016年度 大学共同研究（公募研究A） 研究成果報告書

所属・職・氏名： 研究代表者 教育学部・教授 ・中村 哲
研究分担者 教育学部・教授 ・五百住 満 教育学部・教授 ・峯岸 由治
教育学部・教授 ・佐藤 真 教育学部・准教授・中村 直人
経済学部・教授 ・根岸 紳 文学部 ・教授 ・森田 雅也
社会学部・准教授・鳥羽 美鈴 文学部 ・助教 ・桑原 圭裕

研究課題： グローバル日本文化教育の理論構築と授業実践に関する研究

研究期間： 2016年4月1日～2017年3月31日

研究成果概要（2,000字程度）

1 研究の目的

本研究では、「関西学院大学グローバル日本文化教育研究センター」を核にする共同研究の推進を踏まえてグローバル世界における日本文化の発信と創造を担う人材形成を図るカリキュラムと授業の理論構築と開発・実践研究の推進を目的とする。その理由は、次のように指摘できる。グローバル世界における諸課題への対応として、これまでのような政治と経済の領域だけでなく、政治と経済の領域の土台になるとともに、地域・国家・世界の社会的一員としての個人を結集し、社会創造を図る文化力に国際的関心が向けられてきている。特に、東日本大震災の社会的危機状況における日本人の対応、富士山を含めた地域の世界文化遺産、和食の無形文化遺産の登録、2020年のオリンピック開催決定などの出来事を通して日本人の気質と日本の「伝統と文化」を含めた日本文化への興味・関心は国内外において増大しつつある。その意味では、日本文化を世界の平和と人類の幸福を理念とするグローバル世界の視野から再評価し、新たな日本文化の発信と創造を図ることは、今後のグローバル世界における日本の役割を示す指針になり、その役割遂行を担う人間形成は日本の重要な教育使命でもある。

本研究は、次の研究目的を基本に実施する。

- ① 国内外における日本文化教育の教育課程と教科書に関するリソース収集と既に開発している「伝統と文化（和文化）教育実践 WEBデータベース」に収集リソース情報を蓄積し、研究活動の継続的基盤を構築する。
- ② 国内外における日本文化教育に関する教育課程と教科書に関するリソースに基づいて「日本文化」に関する教育内容を調査する。さらに、「日本文化」に関する教育推進地域での小・中・高等学校のカリキュラムと授業について調査見学をし、授業実践のデジタル映像記録を作る。
- ③ 調査内容に基づいて調査対象のカリキュラムと授業科目の内容構成の課題を検討する。さらに、「日本文化」の観点からカリキュラムと授業科目の内容とそれらの関連と系統を検討する。そして、カリキュラムの編成と授業設計の理論的方法論を解析する。
- ④ 「日本文化」に関するカリキュラムとモデル授業を開発し、国内外の協力学校において授業を実践する。そして、「日本文化」に関するモデル授業実践の授業内容と授業方法の規則性を検証する。
- ⑤ 「日本文化」に関するカリキュラムと授業実践のモデル案を公開し、社会的評価を踏まえ、モデル案の持続的改善を図る。

2 研究の成果

本研究の推進を図るために、2016年度では共同研究会を3回開催し、国内外の調査活動を次のように実施した。共同研究会としては、第1回2016年7月15日、第2回2016年9月10日、第3回2017年3月23日に開催した。海外の調査活動としては、2016年12月20日～12月31日のドイツとフランス訪問を実施した。また、国内の調査活動としては宮城県の仙台市、広島市、東広島市、秋田県由利本庄市の伝統文化教育状況を調査した。本年度の研究においては、研究目的①の事項を踏まえながら②③④⑤の授業の調査・開発・評価を推進すると共に学社連携を図る地域活動の社会的連携の活動も促進する活動がなされた。特に、ドイツとフランスの調査活動は、「鯉のぼり」の開発教材としての歴史的内容と今後の教材研究の課題を検討する重要な機会になった。本調査活動の目的は次の3事項である。第1は、ドイツ国立図書館ライプツィヒ館に保存されている鯉のぼりがウーテン万博（1823年）に出品されたものかの調査。第2は、シュレイダー氏と土井英一氏の墓標の確認。両氏の交流関係の資料の収集、シュレイダー氏の家族関係者への聞き取り等の調査。第3は、クレマンソーの鯉のぼりの残存状況の調査と関連資料の収集。具体的には、12月21日にドイツ国立国会図書館ライプツィヒ館に保存されている「鯉のぼり」の観察調査を実施。夕方には在独日本大使館岩間公使と面会。22日にはドレスデン近郊のマールバッハにてシュレイダー校長と土井英一氏の墓標参拝、シュレイダー氏の孫娘及び地域関係者との面談、シュレイダー氏関係の写真と記録文書の閲覧、学校施設の見学を実施。23日にはマイセン磁器工場を見学。24日にはドレスデン市内の見学。25日にフランスのパリに移動。26日にはギメ東洋美術館とエヌーリ美術館の訪問調査。27日にはクレマンソー記念館の訪問調査。28日にはナンシーへ移動して、ロレーヌ大学のゴ教授と面談。その後、パリにて在仏日本大使館大川一等書記官と面会。29日にベルリンへ移動。30日にベルリンからフランクフルト経由で帰国。

この調査活動の成果は次のように指摘できる。ウーテン万博（1823年）に出品されたものかの証拠資料として、鯉のぼりの紙資料を証明する資料の確認がなされた。第2は、マールバッハの墓標と交流関係の資料の確認がなされた。これらの資料を通して「国際友好鯉のぼりの会」の設立経緯を解明する可能性が指摘できる。第3はギメ東洋美術館とクレマンソー記念館での調査協力により、残存鯉のぼりの状況と鯉のぼり以外の贈呈品であった「雛飾り」の存在が確認できた。これらの調査目的と共にマイセンでの日本陶器の影響とロレーヌ大学におけるゴ教授との面会において教師の指導活動における「間合い」の観点が日本文化の思想と関連する共通理解がなされた。これらの研究成果としては、次の論文と著書が指摘できる。和文化教育学会『和文化教育研究紀要』（第10号2016年8月）「高校日本史教科書における意文化の受容—仏教の伝来と受容に関する記述の検討を通して—」（中村直人）。「関西学院大学教育学論究」（第8号2016年12月）「国際交流としての鯉のぼり活動とその意義」（中村哲）と「小学校社会科学習における地域食文化の教材化—小3社会科授業実践『加須の手打ちうどん』を手がかりに—」（峯岸）。中村哲グローバル日本文化教育研究センター長の退職記念出版として『文化を基軸とする社会系教育の構築』（中村哲編著、風間書房）の刊行。なお、グローバル文化シンボルとして鯉のぼり活動の社会連携活動として「第5回関学キャンパスから舞い揚げよう空の翼！—東北と世界へ羽ばたけ、私たちの願い—」の活動（5月5日）を『門戸厄神地域活性化実行委員会』との共催で実施。さらに、2016年度総合コース「グローバル世界における日本の文化力」の開講講義において研究成果を踏まえた日本文化教育の教材として、「鯉のぼり」「凧」「折り紙」「落語」などの授業を実施し、研究成果の還元もなされている。